

# タンポポ

蒲公英 たんぽぽ

キク科

## ついに勃発したクローン戦争

タンポポには大きく分けて二つのグループがある。一つはカントウタンポポやカンサイタンポポに代表される日本にもともとある在来タンポポ。もう一つはセイヨウタンポポやアカミタンポポなど明治以降に外国からやってきた外来タンポポである。在来のタンポポと外来のタンポポは花の下側にある総包片そうほうへんで簡単に見分けられる。外来タンポポは総包片が反り返るが、在来のタンポポは総包片が反り返らない。この違いから在来タンポポと外来タンポポの分布を調べるタンポポ調査が各地で行なわれている。

在来タンポポと外来タンポポとは激しく勢力圏を争っている。俗に「タンポポ戦争」と呼ばれているほどだ。それでは、在来タンポポと外来タンポポ、両者の戦力分析を試みよう。

花の咲く時期はどうだろう。在来のタンポポは春しか花を咲かせることができないが、外来のタンポポは一年中いつでも花を咲かせることができる。何度でも花を咲かせ、種子を作ることが可能なのだ。

②

種子の生産数はどうだろう。在来のタンポポは花も小さく種子の数も少ないのに比べ、外来のタンポポは花が大きく、生産される種子の数が多い。さらに外来タンポポのほうが、種子が小さく軽いのでより遠くまで飛ぶことができる。

さらに外来タンポポはふつうの種子ではなく、クローン遺伝子によって種子を作る能力を身につけている。クローンで増えるということは、受粉する相手がいなくても一株あればどんどん増えることができることになる。これは新天地に勢力を拡大していくうえで、きわめて有利な性質だ。

戦力分析の結果は、どれをとっても外来タンポポのほうが優勢である。

タンポポ調査を行なうと、一般に外来タンポポは都市部に多く、勢力を拡大している。一方の在来タンポポは郊外や田園部に見られ、その分布は減少しつつある。いかにも、外来タンポポが市街地を制圧し、追いやられた在来タンポポが郊外へと落ち延びているようにも見えるが、実はそうではない。そもそも在来タンポポと外来タンポポが戦っているという表現が正しくない。在来のタンポポを郊外へ押しやっている要因、それは人間による環境破壊が主なものである。

種子の小さな外来タンポポは、他の植物との生存競争には決して強くない。昔からある在来の植物がしっかり生えていれば外来の植物は太刀打ちできず、簡単には生存でき

ないのである。しかし、都市部ではもともとあった自然が破壊されている。ライバルのいない空き地ができて外来タンポポは初めて生存の場所を確保できたのである。そうなれば外来タンポポは強い。一個体あれば種子を生産し、もはや在来タンポポがいなくなった土地に広がっていったのだ。

外来タンポポが広がっているということは、見方を変えれば、人間によって環境破壊された面積が広がっているということに過ぎないのだ。外来タンポポが在来タンポポを駆逐しているというのはまったくの濡れ衣なのである。そのうえ、そう騒ぎ立てているのも人間なのだから質<sup>たち</sup>が悪い。



【在来タンポポ】

④

タンポポが人間にとっていつまでも身近な花であり続けるために、外来タンポポはそう願いながら、自然が破壊された都市部で懸命に在来タンポポの代役を務めているのかもしれない。もし、外来タンポポがなかったとしたら、私たちの身のまわりはずいぶん殺風景なものになってしまわないだろうか。

お礼をいわれてもいくらなののに、さんざん悪者扱いされた外来タンポポは、それならばと本気で勢力拡大に乗り出した。最近になって、本来は在来タンポポの勢力圏であるはずの場所で、外見からは外来タンポポと判断される個体が増加しつつあるのである。

ホラー映画「パラサイト・イヴ」では

【外来タンポポ】





人間の細胞内に共生するミトコンドリアが反乱を起こし、自らの遺伝子を組み込んで宿主である人間を乗っ取ってしまう。同じように外来タンポポも遺伝子レベルで在来タンポポに侵入する作戦に出たのである。

外来タンポポの花粉を在来タンポポに授粉して、雑種を作ると二分の一が外来タンポポの遺伝子となる。その雑種にさらに外来タンポポの花粉を授粉すれば四分の三。こうしてだんだんと血を濃くしながら在来タンポポの体を汚染していくのである。雑種はクローンの種子を作って増殖しながら、一方で、さらに在来タンポポと交雑していく。

不公平なことに、外来タンポポはクローン種子で増えるので、もともとの純血の個体は減ることなくしつかりと残っていく。一方の在来タンポポはたまらない。種子を作るためにはどうしても他の個体と交雑しなければならぬから、雑種化する可能性がしだいに高くなっていくのだ。

外来タンポポはこうして在来タンポポを雑種化し、純血の在来タンポポを減少させていく。郊外で外来タンポポが増えたように見えたのは、雑種になって在来タンポポの遺伝子をうまく取り入れていったからである。

「まわりに大勢いたはずの仲間が、知らぬ間にみんなエイリアンに乗り移られていた」  
在来タンポポは今、そんなSF小説顔負けの恐怖のなかにあるのである。

## 名称 [編集]

---

古くはフヂナ、タナと呼ばれた<sup>[1]</sup>。タンポポはもと鼓を意味する小児語であった<sup>[1]</sup>。江戸時代にはタンポポはツツミグサ(鼓草)と呼ばれていたことから、転じて植物もタンポポと呼ばれるようになったのが通説であるが、その他にも諸説ある<sup>[1]</sup>。

英語名のダンディライオン(dandelion)はフランス語で「ライオンの歯」を意味するダン＝ド＝リオン(dent-de-lion)に由来し、これはギザギザした葉がライオンの牙を連想させることによる。

## 特徴 [編集]

---

多くの種では黄色い花を咲かせ、綿毛(冠毛)のついた種子を作る。生命力の強い植物で、アスファルトの裂目から生えることもある。50センチ以上もの長い根を持ち、最大で1メートル程度まで伸びる個体も珍しくない。

成長点が地面近くに位置するロゼット型の生育型で、茎が非常に短く葉が水平に広がっている。このため、表面の花や茎を刈っても容易に再び生え始める。攪乱の頻発する、他の植物が生きていけないような厳しい環境下で生えていることが多い。

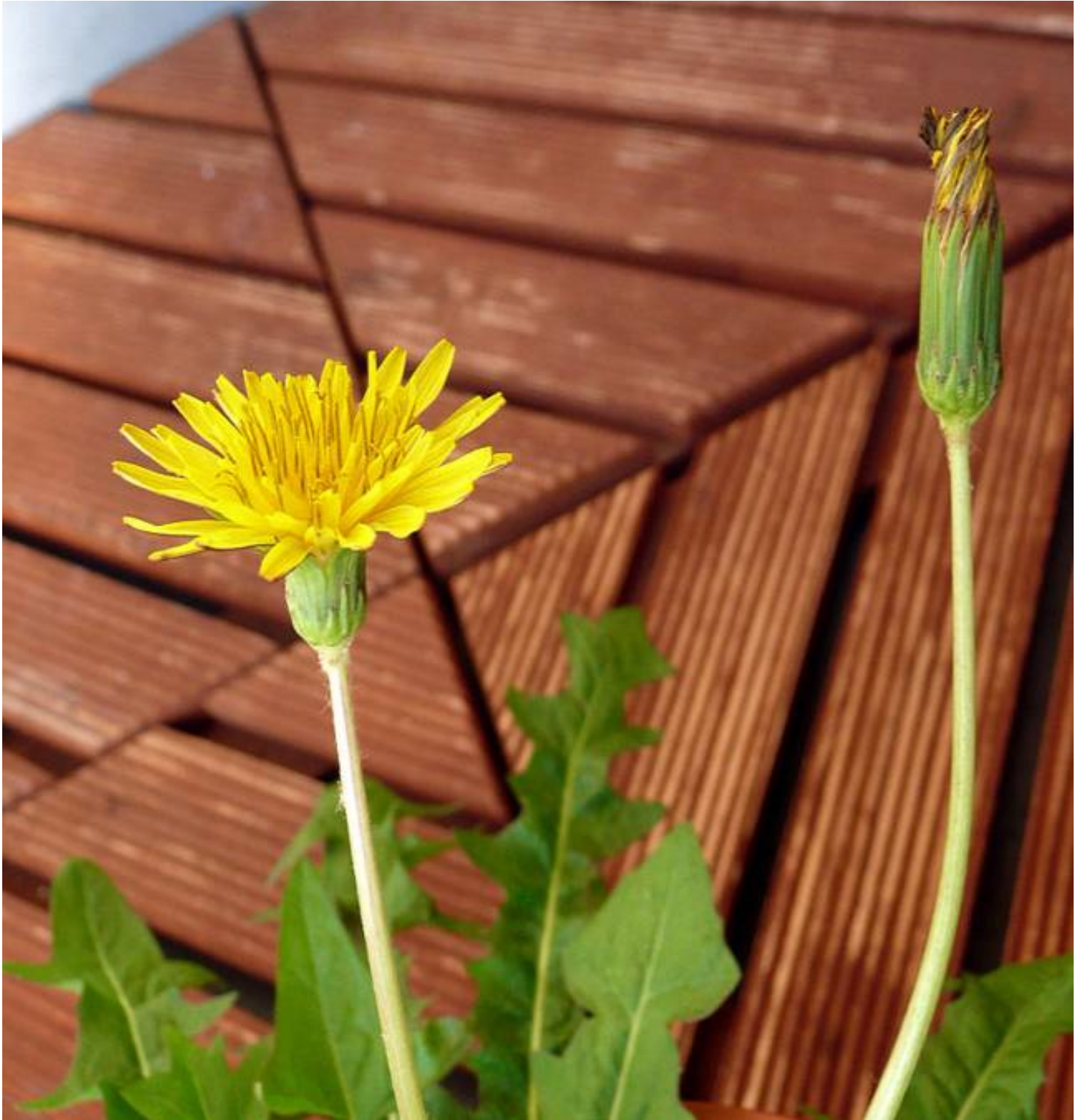
古典園芸植物の1つで、江戸時代幕末には園芸化され、数十の品種があった。

朝花が開き、夕方花が閉じる。



































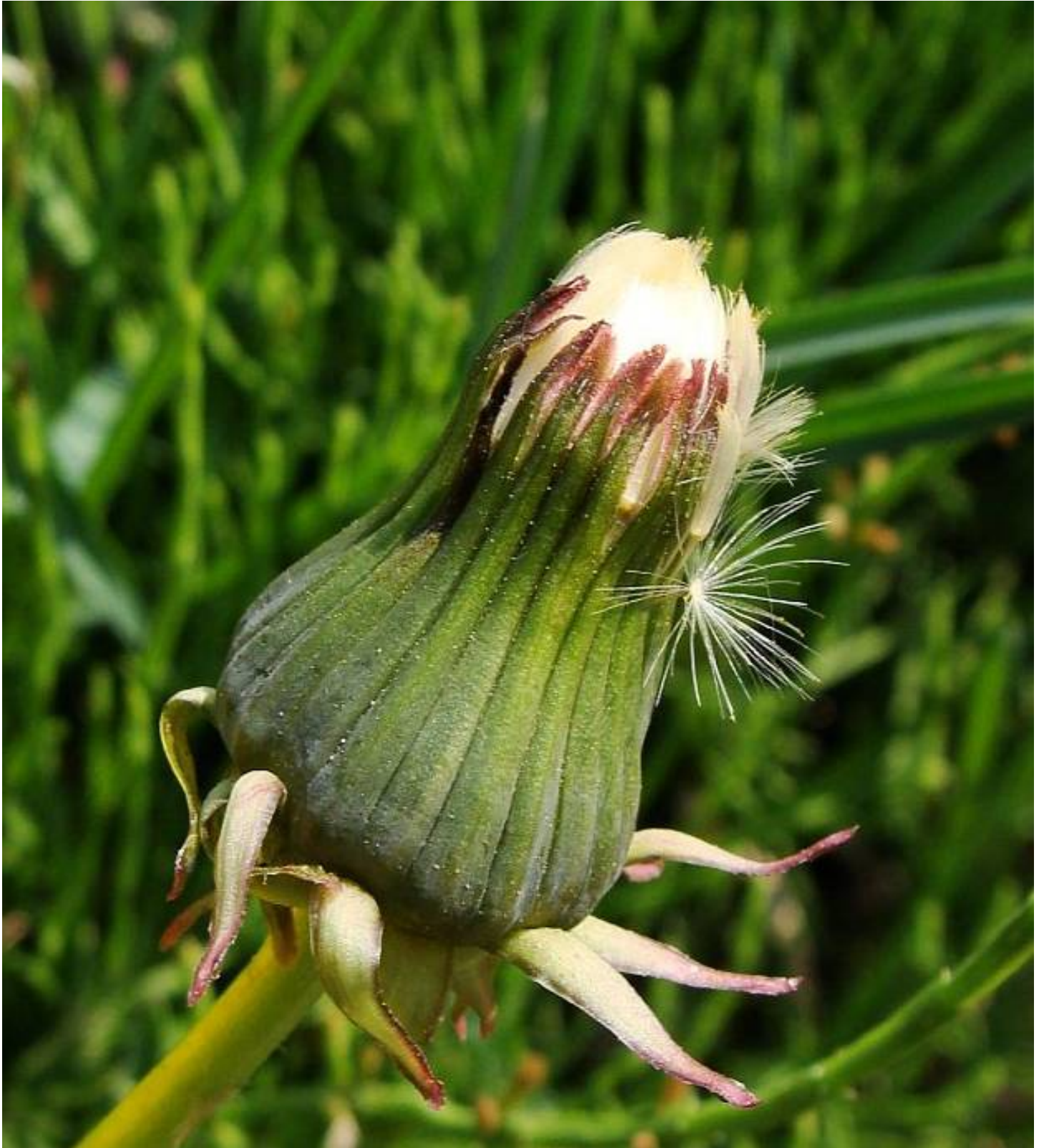





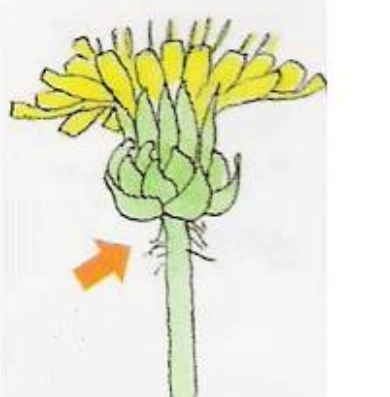








(1) 外来種と日本在来種の見分け方

<p>外来種 セイヨウタンポポ</p>		<p>外側の総包(そうほう)片は 下に反転</p>
<p>日本在来種 シロバナタンポポ トウカイタンポポ カントウタンポポ カンサイタンポポ エゾタンポポ</p>		<p>外側の総包(そうほう)片は 下に反転しない</p>

花の下の総苞(そうほう)がそり返る。

花の下の総苞(そうほう)はそり返らない。

セイヨウタンポポ

カンサイタンポポ



外来種の総苞



在来種の総苞



花の下の総苞(そうほう)はそり返らない。

カンサイタンポポ



花の下の総苞(そうほう)がそり返る。

セイヨウタンポポ



## ■ タンポポの仲間 ■

(蒲公英:キク科)

### 語源

花の後の綿毛(球形果)を、タンポ(綿をまるめてぬのや皮でつつんだもの)に見立てて付けられたといわれています。タンポはけいこ用の槍の先に付けたり、拓本を取るとき墨を付けるのに用います。また、花を横から見たときの形が鼓ににていて、かつ鼓のタタンポンポンという音を連想した物ともいわれています。

## 2: タンポポの戦略

タンポポは、冬の寒さをしのぐため、葉をロゼット状に地面を這うようにして、一枚一枚の葉は重ならないように広げて、冷たい風を避けるとともに太陽の光を少しでもたくさん受けとめるようにしています。

また、冬の間葉を枯らして水分の蒸発を防ぎながら根に養分を蓄え続けています

タンポポは、上に伸びるような茎を持たず花茎しかない背の低い植物です。他の草花との生存競争では同時に花を咲かせては背の低いタンポポには光が届きません。そこで、寒い冬の間花芽を育て、春になると他の植物に先駆けて花芽を出して花を咲かせるのです。そしていち早く種子を作りそれを飛ばします。

だから・・・たんぽぽの咲いてる時期を考えると、周りにはタンポポよりも背の高い植物が咲いていないせいか、たんぽぽが目立つのかも知れません。

(2) 日本在来種タンポポの見分け方

花の色が白い  
シロバナタンポポ



世界で4種のうち、  
日本では2種自生してる

花の色が黄色い  
トウカイトンポポ  
カントウタンポポ  
カンサイタンポポ  
エゾタンポポ





(3) 黄色い花の日本在来種タンポポの見分け方 (花が咲く前の状態を見るとわかりやすい)

	<p>トウカイタンポポ</p>	<p>A: 総包 B: 突起 Bの部分がAの半分 以上ある。 別名: ヒロハタタンポ ポ</p>
	<p>カントウタンポポ</p>	<p>Bの部分がAの半分以下。 別名アズマタンポポ</p>
	<p>カンサイタンポポ</p>	<p>Bの部分がAの半分以下。 総包が細い</p>
	<p>エゾタンポポ</p>	<p>Bの部分がAの以下。 総苞全体がもっさりした丸い感じで厚 みがある</p>



花にできる種子は外来種(セイヨウタンポポ)のほうが在来種よりも2倍あり、一つの株に咲く花の数、そして発芽率も同じく2倍あり、外来種の方が勝っています。さらに、花が咲くまでの期間は外来種は1年、在来種が2年です。さらに種子を飛ばす力は、外来種の方が遠くに飛ばせるため、子孫は在来種よりもたくさん増えます。

もっと驚くことは在来種は受精によって子孫を増やすため、まとまって咲いてます。それに対して外来種は単為生殖なのです。虫の媒介は必要とせずに子孫を増やすことができます。

以上の事を考えると在来種はいずれ全滅の道をたどりそうだが・・・受精という武器を持ってるため環境に適応する突然変異を作ることが可能なのです。そして・・・すでにセイヨウタンポポのすぐれた能力を一部取り入れて(遺伝子)、雑種を形成してるのが見つかってます。花粉を作らない外来種にはそのような可能性はありません。

すなわち、花粉なしのタンポポは遺伝子交流という多様性の含む戦略的方策を捨てたので逃げ道が無くいわば進化ができないのです。

長い歴史を考えると在来種の優位性は目に見えるはずですがいかがでしょうか？

## 5: タンポポの花言葉のゆえん

花 暦: 3月23日生まれ

花言葉: 別離

野原をぼんやりと遠くを眺めていました。

ある春の日、野原の美しい黄色い髪の少女を見つけ、ひと目で恋をしてしまいました。

男は胸をときめかせてながら毎日黄色い髪の少女をみつめるようになりました。そのうちにその少女の髪の毛が白くなり、老女になったのです。

その男は嘆き悲しみおおきなため息をつくると白髪の老女はそのため息で飛んでいきました。

また綿毛が飛んでいくさまから「別離」という花言葉が出来ました。

綿毛の飛んでしまった花は、お坊さんの剃った頭に似ているので「坊主頭(ポーペンブルーム)」と呼ばれています。



名前	カンサイタンポポ
----	----------

科名	キク科
----	-----

学名	Taraxacum japonicum Koidz.
----	----------------------------

花期	春
----	---

昔から日本に生えているタンポポです。近畿(きんき)地方よりも西の地方に生えています。

街中では、ヨーロッパから入ってきたセイヨウタンポポのほうが多く見られます。

カンサイタンポポが見られるところは、自然が多く残っているところといえそうです。



名前	セイヨウタンポポ
----	----------

科名	キク科
----	-----

学名	Taraxacum officinale Weber
----	----------------------------

花期	春～秋
----	-----

ヨーロッパから入ってきたタンポポで、現在では、もともと日本に生えるカンサイタンポポなどよりも多く見かけます。

カンサイタンポポよりも花びらの数も多く、大きな感じがします。



名前	シロバナタンポポ
科名	キク科
学名	Taraxacum albidum
花期	春

西日本に多いタンポポです。九州では「タンポポは白色」というぐらい、シロバナタンポポが多いそうです。

葉の色はほかのタンポポより、うすい緑色をしています。

花の下の総苞(そうほう)は少しそり返っています。